

ヒマラヤ

No. 111

●特集 カンチェンジュンガ縦走



1981 FEB

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

クン (7,077 m)

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂するという成果をあげて帰国しました(本誌109号既報)。隊員の中にはすでにヒマラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。H A Jでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もでてきております。

1982年度はカシミール・ヒマラヤの秀峰クン(7,077m)にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目的 ①クン(7,077m)登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期 1982年7月末～8月末
- 負担金 69万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員 20名(申込順)
インストラクター4名(医師含む)
- 申込み 1981年11月末までに下記宛に申込みこと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会
TEL03-367-8521

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

グレート・シェルフより望むヤルンカン(8,505m)より主峰(8,598m)への稜線

ヒマラヤ No.111

1. ヒマラヤ放談 ————— 小方全弘
5. ヒマラヤニュース<地域・トピックス・インフォメーション・新刊>
8. 特集 カンチェンジュンガ縦走 ————— H A J 特別事業委員会
15. 1980年寄贈図書一覧
16. 連載 遠征学入門② ————— 清水 澄
18. ヒマラヤ閑話⑥ ————— 水野 勉
20. トレッキング許可で登れる山⑤<ラムドゥン> — 岡 秀 郎
24. 寸感・事務局日誌

ヒマラヤ放談

豊かな森林に囲まれて、今では数少なくなった7,000メートル級未踏峰が立ち並ぶ国、ブータン。それはクローズされているが故に、往古の素朴さを現代に残した魅惑の国でもある。今月は、ブータンに通いつづけて、本邦で最もブータンをよく知る一人である小方全弘氏に御登場願ひ、ブータン談議を伺うことにした。折りも折り、近々日本ブータン友好協会（仮称）が設立され、氏がその実質的推進の仕事を手がけておられるとか（前号ニュース欄既載）。協会の話もあわせて伺ってみた次第である。



小方 全弘

●最初は山に登りたかった

—— ブータンにはずっと通いつづけておられるんですか？

小方 いや、74年を最後に行っていないです。あの戴冠式の時が最後です。そのあと家業を継いじゃったんで、ちょっと行けなくなった。

—— それまでは頻繁に出かけられていますね。

小方 えーと、5回行きました。68年から始まって……。

—— 最初はどんなことが発端で行かれたんですか？

小方 1958年に川喜田さんとネパールに行きました。西北ネパールへね。その時カルカッタまでブータンへ行く中尾さんと一緒だったもんだから。きっかけといえばそんなことかな。

—— ドルボへ行かれた時ですね。あの本（ネパール王国探検記）も楽しく読ませてもらいましたよ。

小方 あのあとブータンへ行きたくてねえ。ずいぶんとねちっこくやったんだけど、10年かかりましたよ。

—— ブータンへ行った日本人というのは、中尾さんが最初ですか？

小方 正式にはそうですがね。多田等観さんが

「チベット」という本の中でちょっと書いてます。ブータンに入ったと。ただ彼が入ったのはカーリンボンだと思うんです。もう死んじゃったからわからないですけどね。たぶんカーリンボンです。当時（戦前）のカーリンボンはブータン領でしたから……。

—— 例によってインドが分捕ったんですか？

小方 いや、あのアッサム寄りのほうにデワングリという土地があるんですがね、ブータン戦争の時にインド領になった所です。ここがインドの独立の時に再びブータン領になって、かわりに飛び地だったカーリンボンがインド領になったんです。だから、今でもカーリンボンにブータンハウスがある。

—— 多田さんは現在のブータンの土地には足を踏み入れてないんですね。

小方 と、思います。あと例の西川一三さんがちょっと入ってるんじゃないかな。これは直接本人に聞いたんですが、たぶん国境は越えているだろうということでした。最初、カーリンボンでタバコの密売かなんかをやってたんですね。それでブータン人とつきあいができて、どこかで峠を越えたいらしい。まあ、正式にブータン王国に入って、しかも奥深くまで行ったのは、中尾さんが最初でしょう。

—— で、小方さんが2番めですか？

小方 いや、私の前に西岡京治さんが入ってるし、あと国連の調査で何人か入ってますよ。

—— まあ今では小方さんといえば、ブータンの第一人者という感じですが、何回も通われたというのは、何か目的があったんですか？

小方 やっぱり最初は山に登りたかった。これは誰でもそうでしょう。何たって未登峰の宝庫ですから。だけどブータンの人たちとつきあえば、つきあうほどそれがむづかしいということがわかってきた。結局ブータンという国の立場のむづかしさですね。インドと中国に挟まれて、そのバランスの中で生きていかなければならない。だからその辺のむづかしい事情が具体的なことでわかってくると、無理が云えなくなってくる。だけど、ブータン人というのは何しろ人間がいいですからねえ。また、ついつい行きたくなるんですよ。

●ブータンはビルマに近い？

—— 小方さんもかつては同志社で山登りをしてらして、最初はネパールへ行かれた。けれども以後山登りのできる国に行かないで、ブータンに通った。よほど魅せられたんですね。

小方 まず第一に自然そのものがすばらしい。動物とか植物とか、素人が見ても未知だしね。花採ってきたり蝶々つかまえたりすると、その中から新種が出たりするわけですよ。

—— 周辺のヒマラヤ諸国、ネパールとかインドとかと比べてみて、ブータンという国の際立った特色というとどんなことでしょうか。

小方 ひとつ言えることは、グレートヒマラヤを挟んで南側の位置にラマ教文化圏があるということですね。他のヒマラヤ周辺諸国の場合は、ラマ教圏っていうとグレートヒマラヤの北か、せいぜい中くらいでしょ。それともうひとつ、いわゆるヒマラヤ南斜面で自主独立できている国って少ないでしょう。まあ、あっても食糧不足とか他の国に頼るとかっていうケースが多い。ネパールにしてもアフガニスタンにしてもね。ところがブータンの場合は100万の人口をささえていくのに十分な食糧を持っている。それで長いこと鎖国状態だったから、ぜいたくを知らない。ぜいたくを知

らないということは、いいことですよ。だから乞食がない。少なくとも私の知っている74年まではまったくいなかった。

—— それはめずらしいですね。あの辺の国では大変な稀少価値ということになりますね。

小方 いや、でもねえ、ネパールだって私が初めて行った頃はいなかったですよ。カルカッタからカトマンズ入りすると、ホッとしましたもんです。

—— インドからネパールに入ってホッとするというのは今でもそうですね。

小方 ええ、でもネパールは変りましたよ。まったくびっくりするくらいです。

—— 私などは70年代以後になって通い出した世代ですから、物乞いのいないネパールなんて想像もつきませんよ。

小方 そういうものだと思いますんでしょ。かつては違ったんですよ。

—— ブータンでは今でも乞食がないんでしょうか？

小方 さあ、どうでしょうかね。たぶんいないと思いますよ。あの国はずっとクローズされてましたから古い面もありますが、非常にいい面も数多く残っています。病気にしても結核というものがない。

—— 平均寿命も割と長いんですか？

小方 それがどういう訳か長くないんです。

—— やっぱり乳児死亡率が高いんですかね。

小方 女が産後によく死ぬような気がするんですが、よくわからない。

—— ブータンの言葉はもうかなりおできになるんでしょう？

小方 いや、あの国は上流階級とつきあう分には英語で用が足りる。あと坊さん連中とはチベット語です。チベット語は一応勉強しましたがね。それで、坊さんとつきあっていて「弟子になれ」なんて言われたりしてね(笑)。

—— ひと口にラマ教といってもブータンのラマ教とネパールのそれでは異なった面もあるんでしょうね。

小方 ええ、もちろん違います。まあ私は専門外ですから良くわかりませんが、ブータンとネパールの北のほうでは派が違うでしょう。仏教の伝

わった経路がたぶん違うんじゃないかな。

—— ネパール北部のは、インドから西進してバミールを通して、いわゆる時計まわりのコースでぐるっとまわってきてるんですね。

小方 ブータンのはインドから直接かもしれないな。

—— つまりビルマなんかと同じですね。

小方 言語はブータンの場合ビルマに近いですよ。いわゆるビルマ・チベット語系ということなんですが、どちらかというビルマに近い。ただ仏教伝播の経路については、非常に問題になっているようです。

●どっしりした雪山が多い

—— 山についてはどうですか？ ブータンの山というのは……？

小方 昔、深田久弥さんが言ってらしたけど、シッキムのチュンピ川を境に西と東に分けると、西へ行けば行くほどアルプス的になる。つまりけわしくなってくるんですね。東に行くとき非常にどっしりとした雪山ですね。ブータンの山はその典型です。森林限界も高く、場合によっては4,500メートルまで森林です。

—— 7,000メートル以上の山がかなりありますよね。

小方 あります。ギャンケ・ブンツムが最高峰で7,541m。まあ標高に関してはブータンの山はみんないいかげんですから、何だかわからないですがね。タカ・コン、マカ・コンが7,000ギリギリか、あるいは7,000切ってるかなあ。

—— ひと頃ブータンの最高峰といわれたクラ・カンリは中国領なんですよ。

小方 あの山の手前に谷があってね。ここの住民が中国政府に税金を払ってるから、完全に国境の向う側ですよ。でも、だいたいどの国も「あの山は俺とこの山だよ」なんて勝手に言うから、山岳地帯の国境なんて何が本当かわからんけどね(笑)。

—— そうですね。それで昔のあの北大のナラカンカールみたいなおかしなことが起る(笑)。

●11月25日に設立総会

—— ところで日本ブータン友好協会ですが、どういふふうな活動をめざしていらっしゃるんですか？

小方 今、ブータンの人たちがかなり来ってますよ。そんな時、みんな個人的なつきあいはしているけれども、まあ一杯飲むとかそんな程度ですよ。そうじゃなくてもっと組織的にいろいろなめんどろをみてあげたり、必要とあらば多少の政治的なサポートの役割を果たしたり、あるいはまた我々でブータンのことをいろいろと世に広めていったり……と、まあそんなことを考えています。お金がないですから、たいしたことはできませんがね(笑)。まあ、発起人に名をつらねた人たちはそれぞれ胸に一物があるようですよ。もちろん私もありますし。

—— と、おっしゃると？

小方 たとえば、登山許可を取って第一番にどこか登っちゃうとか(笑)。

—— そりゃ最高ですね(笑)。

小方 まあ、そう簡単にはいかないだろうけど。

—— ところで言い出しっぺはどなたですか？

小方 西堀栄三郎さんです。

—— 以下錚錚たるメンバーが並んでますね。

小方 ええ、そこのところでちょっと問題があるんです。というのは、桑原武夫とか東郷文彦とか、元駐印大使の宇山厚とか、あるいは中根千枝さんとかってというのは、ブータンでもかなり知られた人たちなんです。で、こういう人たちを並べて協会を発足させると、ブータンの側でかなり期待を持ってしまふんじゃないかと思う。「こんな立派な組織ができて、何かしてくれるのかしら」なんて思われてしまふんじゃないかと思うんです。でも実際のところ、今の我々にはたいしたことは何もできないわけで、意味もなく向うに期待を持たせるのはあまり好ましくない。実はそんな訳で、作ろう作ろうと言いが1年間ぐらいうじうじしてたんです。でも、まあ中国の問題も最近良くなってきているし、今のうちに作ろうということになってね。西堀さんにハッパをかけられて腰があがったんです。

—— 会長はどなたになりそうですか？

小方 桑原さんです。年令的に一番上だし、あ

と西畑さんは日本ネパール協会をやってるし……。

—— 本部はどちらに？

小方 今のところ私の会社に置いてますが、いずれは東京に持っていくつもりです。

—— 入会は誰でもできるんですね。

小方 そりゃもう誰でも大歓迎ですよ。1月25日が設立総会の予定です。

—— 実質的な運営はどんなふうな形でやっつかれるんですか？

小方 当分は私がやるしかないでしょう。あとみんな偉すぎるからねえ。まあ、そのうちかわいい女の子でも引きずり込んで手伝わせますよ(笑)。

—— 今は雑務をやる若い人っていないんですか？

小方 中坪君というのがやってくれているけどね。ただ、この男も忙しくてね。

—— やはり法人化をめざされるんでしょうね。

小方 ええ、将来は法人格を持たなきゃならんと思ってます。お宅はもう法人になるんでしょう？

—— ええ、来年にはなります。ところでお金のほうは集ってるんですか？

小方 うん。こういうことを始めて感じたんだけど、学者をだますのは訳のないことですよ(笑)。とにかくまずお金を出してくれて言ったら、もうバンバン入ってくるんですよ。これで「やめめた」なんて言ったら、金だけ残っちゃう(笑)。

—— 結構なことですねえ(笑)。発足したら日

ネ協会とかウチみたいに地域地域で集会をやったりするんですか？

小方 ええ、そうなるでしょうね。

—— 入会希望はもうかなり来てるんですか？

小方 いや、まだぜんぜん。今、いろいろと手を打ってるんですよ。お宅にもちょっとお願いしたし、あと日本山岳会とか日ネ協会とか、山溪にも掲載してもらったし、来週には桑原さんが京都大学で記者会見もする。そのうち反応が出てくるでしょう。

—— しばらくは大変ですね。

小方 ええ、電話代だけでも大変なものですよ。でも、先生方が結構やってくれるので助かります。桑原さんなんて、そりゃもう熱心なもんです。あの人は若い女の子をいっぱい集められるからいいですよ(笑)。

—— ああ、フランス文学のほうですね。そりゃいいですね(笑)。

小方 何がいいんだかわからない(笑)。

—— でも楽しそうですね。ウチの協会からかなり入会者が出るかも知れませんよ。

小方 そう願いたいです。

—— その時はよろしく願います。今日はどうもありがとうございました。

(インタビュー構成 角田不二)

年報「ヒマラヤ'80」の送付について

大変遅くなりましたが、H A J年報「HIMALAYA1980年版」ができあがりしましたので、H A J会員で55年度会費を完納されている方には無料で送付致します。なお、未納の方には納入のあるまで送付を見送らせていただきますので、御了承願います。非会員で購入御希望の方は、定価2,000円及び送料300円を添えて事務局まで申し込み下さい。

なお、現在のH A Jの財政能力では、毎月の機関誌と会員名簿に加えて年報までも無料送付することは非常に困難がともない、赤字財政となることを覚悟せねばなりません。そこで、今年度はとりあえず無料で送付致しますが、来年度よりしば

らくの間、御希望の会員の方には定価の半額を負担していただくシステムとする予定であります。よろしく御了承のほどお願い致します。

《年報の内容》

I 遠征報告<パツラ1978・西郡光昭、キャッシュドラル1979・山倉洋一> II 研究・資料<日本人のヒマラヤ登山と死亡事故・山森欣一、ダンビルの地図帳をながめて・堀内立三、日本ヒマラヤ会議抄録(山形会場から)・広島三朗・稲田定重・西郡光昭、月刊ヒマラヤ1~100号地域別索引> III 会務<事務局日誌・新入会員紹介>

※A5判160ページ上製本

地域ニュース

《パキスタン》

イスラマバードにゲストハウス

パキスタンの首都イスラマバードに“ゲストハウスシルクロード”なるものが作られた。このハウスはマルガラセルの近くにあり、周囲には各国大使館、スーパーマーケット、アワンのオフィス、各地へのバスの発着所などがあり、また外人登録事務所も81年からイスラマバードのスーパーマーケットに移るとのことで、登山・トレッキングの準備に便利な場所のようである。ハウスには自転車も設置しており、税・サービス料、チップ等は一切なく、宿泊料は下記のとおり。

1人部屋 60Rs～、2人部屋 60～150Rs、3人部屋 180Rs、4人部屋 250R、6人部屋 240Rs、テントサイト1張 10Rs+1人につき 10Rs。

なお、同ハウスでは旅行エージェントの業務も行っており、別送貨物の通関、輸送手配、ハイポーターの斡旋、各地の情報提供、通訳などを引き受けている。

<住所> F/6 ISLAMABAD PAKISTAN

トピックス

高所順応研究会開催さる

さる12月14日(日)、午前10時より午後4時まで、東京・八丁堀の勤労福祉会館にて東京都山岳連盟主催による「高所順応研究会」が開催された。同研究会は特に81年度の登山隊に向けて開かれたもので、岳連加盟未加盟あわせて17登山隊66名の参加を得た。

最初に本多昭一都岳連副会長のあいさつがあり、つづいて海外委員の山森欣一氏より、70年代におけるヒマラヤ登山の事故についての調査報告及び

対策が話された。特に最近都市型の山岳会において顕著となってきたリーダー・シッパの欠如が組織登山に対してもたらず弊害が指摘された。

つづいて80年夏、ガッシャーブルムII(8,035m)に遠征したベルニナ山岳会登山隊の佐藤英雄隊長と渡辺良政登攀隊長から、高所順応失敗の体験談が提供された。同登山隊は登頂には成功したが、渡辺登攀隊長がBCにおいて肺水種にかかって意識不明となり、ヘリコプターで救助する等のアクシデントがあった。渡辺氏は、肺水種にかかると、呼吸するたびに肺がゴボゴボし、横になると苦しく、起きあがるとさほどでもなくなる等の症例を報告したが、BCではまったく肺水種にかかったことが判断できず、発見が遅れたと語った。もっと早期に発見するためには基礎知識が絶対に必要であり、真剣に勉強しなければならないことが指摘された。

昼食のあと、HAJの西郡光昭氏から、高所順応及び障害についての講演があった。肺水種、過換気症候群など、様々な症例についての具体例、及びその対策などが語られ、参加者の興味を誘っていた。

午後4時、土居正勝海外委員長のあいさつで閉会した。

HAJカンチ隊3名が出発

～壮行会は1月29日(金)～

カンチェンジュンガ西峰(ヤルンカン8,505m)から主峰(8,598m)への縦走をめざすHAJカンチェンジュンガ隊は、2月11日の本隊出発に先立ち、3名の先発隊員が既にカトマンズ入りし、現地での準備をすすめている。まず、菊地薫副隊長が12月10日に、つづいて山田昇隊員が12月21日、片岡邦夫隊員が1月7日と、それぞれ成田からたっていった。隊はさらに2月1日に4名、11日に15名、15日に1名と続々と出発していく予定であり、HAJ始まって以来の大登山隊は大きく動き出している。

なお、同隊の壮行会は1月29日(金)午後7時より東京・池袋の東方会館にて開催される。問い合わせは事務局

インフォメーション

海外登山技術研究会（日山協）

日本山岳協会主催による恒例の海外登山技術研究会は、今年で第19回目となるが、下記のとおり開催される。

- ◇日時 1月24日(土)～25日(日)
- ◇場所 大学セミナーハウス(東京・八王子)
- ◇内容 カンチェンジュンガ無酸素登頂の検討
高所鍛練と高所順化
- ◇参加費用 10,000円(宿泊費・資料代含む)
- ◇申込み 所属山岳会名、住所、氏名、年令を明記し、現金書留にて参加費同封のうえ、下記へ。なお、日山協所属以外の方の参加も受付けています。

新刊図書一覧

- ①NHK取材班、「永遠のガンジス」、日本放送出版協会、1980・11、214p、1,100円。
- ②高橋喜平、「雪と人生」、岳書房、1980・11、194p、1,600円。
- ③平山郁夫、「ローマから大和へ — 平山郁夫シルクロード素描集 —」、集英社、1980・11、126p、6,500円、(B4版)。
- ④杉山二郎、「正倉院 — 流砂と潮の香の秘密をさぐる —」、瑠璃書房、3,800円、(地方小出版流通センター扱い)。
- ⑤斎藤栄三郎、「80年代イスラム社会の読み方」、通産新報社出版局、1980・11、215p、1,600円。
- ⑥戸川安雄、「海のシルクロード」、徳間書房、1980・11、238p、980円。
- ⑦司修、「ウイグルの砂漠とオアシスを往く — 司修素描集 —」、中西画廊(東京・新宿)、1980・11、95p、4,500円、(同画廊03-348-6381)。
- ⑧紀大椿・編、「1821—1950年中西回我曆表」新疆(中国)、新疆人民出版社、1978・6、267p、0.97元=590円、(曆対照表。初版6,000部)。
- ⑨後藤晃、「ムハンマドとアラブ」、東京新聞出版局、1980・12、232p、1,200円、(オリエント選書・6)。
- ⑩加納弘勝、「イラン社会を解剖する」、東京新聞出版局、1980・12、243p、1,200円、(オリエント選書・4)。
- ⑪張仁仲/著、楊逸舟/訳、「ビルマ戦線従軍記 — 中国人のみた北緬戦線の証言 —」、共栄書房、1980・11、305p、1,400円、(「大東亜戦争秘録」)。
- ⑫内記良一、「アラビア語小辞典」、大学書林、1980・11、XIV+432p、4,800円。
- ⑬古賀保夫、「死者の谷 — 知られざるビルマ密林作戦 —」、昭和出版、1980・10、275p、1,500円。
- ⑭黒柳恒男/編、「ペルシア語会話練習帳」、大学書林、1980・12、VI+199p、2,300円。
- ⑮中国文物出版社・平凡社、「敦煌莫高窟・北朝」平凡社、1980・272p、(A4版)、25,000円、(全五巻中第一回配本)。
- ⑯服部孝司、「頂は誰がために — ラトックI峰登頂の記録 —」、山と溪谷社、1981・1、274p、1,200円、(山溪ノンフィクションブックス)。
- ⑰陳舜臣、「新西遊記・上下」、読売新聞社、(新装版)、上=1980・11、229p、950円。下=1980・11、214p、950円。
- ⑱高木泰夫・編、「ヒンズー・クシュ、カラコルム研究誌/ヒンズー・クシュ、カラコルム登山探検誌」、日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議、1980・12、研究誌=142p、探検誌=241p、4,800円(送料300円)、(「日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議設立10周年・田中栄蔵古稀記念文集I・II」)。
- ⑲蚊塚・著/季羨林・訳、「羅摩衍那 — (一) 童年篇 —」、北京、人民文学出版社、1980・7、8+4+444p、1.60元=960円、(中国語版、ヴァールミーキ・ラーマヤナの中国語訳、全七巻

中第一巻)。

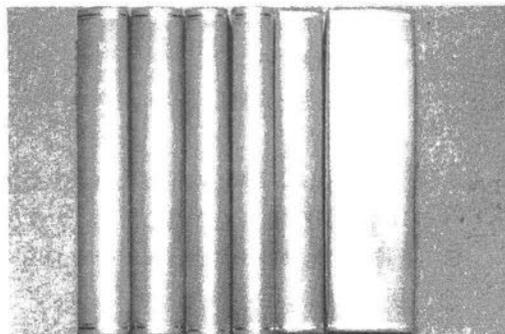
- ㉑山田晋、「インド民族運動史 — ガンディーとイギリス植民地支配 —」、教育社、1980・12、261p、800円、(教育社歴史新書<東洋史>B4)
- ㉒大島直政、「アナトリア歴史紀行 — 東西文明の接点4千年 —」、自由国民社、1981・1、246p、950円。
- ㉓矢吹慶輝・編著、「鳴沙餘韻 — 敦煌出土未傳古逸佛典開寶 —」、臨川書店、1980・11、図録篇=フォリオ版、213p、解説篇=A5版、942p。80,000円(セット価)。
- ㉔美坂哲男、「山のいで湯行脚」、山と溪谷社、1980・12、291p、1,200円。
- ㉕ゲルハルト・レンザー著/織方郁映・橋本信・訳、「プロメリ」、ベースボール・マガジン社、1980・11、325p、2,500円、(改訳・新装版)。
- ㉖地平線会議編集委員会・編、「地平線から — 1979 —」、地平線会議、〔発行年記載無〕、176p、1,500円、(同会議=東京都府中市新町3-9-12、宮本千晴方)。
- ㉗條原壽雄・田中良昭/著、「敦煌仏典と禪」、大東出版社、1980・11、XVII+466p、7,500円、(講座・敦煌、第八巻)。
- ㉘社会科学戦線編集部・編、「民族史論叢」、長春(吉林省)・中国、吉林人民出版社、1980・10、327p、0.97元=590円、(中国語版。初版4,580部)。

- ㉙<<蜀錦史話>>編集、「蜀錦史話」、成都(四川省)・中国、四川人民出版社、1979・8、137p、0.53元=320円、(中国語版。初版18,500部)。
 - ㉚王越・編、「五指山伝説 — 海南島黎族民間故事選 —」、広州(広東省)・中国、広東省人民出版社、1980・9、138p、0.36元=220円、(中国語版)。
 - ㉛「青藏高原地図1/300万」、北京、地図出版社、960円。
 - ㉜松浪健四郎、「誰も書かなかったアフガニスタン — シルクロードの国の現実 —」、サンケイ出版、1980・12、230p、980円。
 - ㉝趙樸初・塚本善隆/監修、日中友好仏教協会・中国仏教協会/編、「中国仏教の旅・4 — 桂林・南昌他 —」、美乃美、1980・12、216p、2,500円。
 - ㉞佐藤テル・大河原由紀子/著、「誰でも行ける楽しいヒマラヤ — カトマンズ周辺 —」、新樹社、1980・11、178p、2,500円。
 - ㉟エドワード・ウィンパー著/H・E・G・ティンダル編/新田義昭・訳、「定訳アルプス登攀記」、森林書房・発行/山と溪谷社・発売、1980・12、XV+503p、6,500円。
 - ㊱伊藤幸司、「富士山」、東京新聞出版局、1980・12、229p、1,800円。
- (資料:藤井 毅)

「ヒマラヤ」合本 —— ヒマラヤの情報が満載

このほど「ヒマラヤ」の合本を製作致しました。今回は61~80号、81~100号の2分冊です。既刊の20~50号、41~60号も若干在庫があります。各冊ともその時代のヒマラヤの様々な話題や情報、またじっくり読める記事などが豊富に掲載され、永久保存版として最適です。

- ① 20~50号 1971年 8月~1976年 1月
 - ② 41~60号 1975年 3月~1976年11月
 - ③ 61~80号 1976年12月~1978年 7月
 - ④ 81~100号 1978年 8月~1981年 2月
- ※①、②は各1部しか在庫がありません。申し込み順にメ切りしますので、HAJ事務局までお早め



に!!

※定価格8,000円。送料実費(まとめて請求書と同封しますので、到着後に振込んで下さい)

KANGCHENJUNGA TRAVARSE

HAJカンチェンジュンガ実行委員会

かねてより当協会が総力をあげて準備をすすめてきたカンチェンジュンガ縦走計画も、いよいよ来たる2月11日、本隊が成田を出発することとなった。今の特集では、その計画の全貌を紹介することとした。

■ 縦走ライン変更の経緯 ■

本計画は、かねてより南峰(S)中央峰(C)主峰(M)の8,500mラインを縦走することで合意し鋭意諸準備を進めてきた(経緯については「ヒマラヤ99号」を参照)。このプランの当初の問題点は

- 1) 縦走ラインはもとより8,000m台の荷上についても無酸素では不可能である。
- 2) 縦走ラインを一日で行うのは不可能である。
- 3) 南峰(S)中央峰(C)が1978年未解禁峰扱いとなった。

これらについては以下のような解決案で対処した。

- 1) 約200本の酸素ボンベを使用する態勢を作る。
- 2) 純粹ではないが中央峰(C)と主峰(M)のコルからのサポート態勢を基本とし、さらに緊急下山用として南峰(S)中央峰(C)のコルのサポートルートを確認する。
- 3) 強力な渉外活動を展開し1981年までにはオープンさせる。

※これらと並行して実戦的な問題を解決するために1980年春偵察隊を派遣し計画に大きな自信を持った(カンチ通信「ヒマラヤ102～105号」参照)。

※1981年までに南峰(S)中央峰(C)がオープンしなかった場合でも、この計画の基本的な願望は「8,500m峰の縦走」ということであるので、これらの実現のためにも1979年1月

ヤルンカン(カンチ西峰(W))の許可を取得して万全を期した(主峰の許可は1978年7月)ネパールでは1980年5月全土を挙げての国民投票が実施される等むづかしい内政問題をかかえていたが、偵察隊は下山後も引き続き強力な渉外活動を進めた結果(S)(C)二峰のオープンに強い自信をもって帰国し、(S)(C)(M)三山縦走の準備に没頭した。

ところが、ネパール登山規則による4ヶ月前登山申請のタイムリミットが迫った1980年秋になっても現実に(S)(C)はオープンされなかった。一方、計画の資金的な面からも予算が序々に膨れあがり、逆に厳しい経済情勢の中で外部資金の調達は遅れ気味であった。こうした状況の中にあっても8,500m峰縦走への願望は変わらず、計画全体の見直しをした結果、より少い酸素ボンベの使用で実現可能な(W)～(M)のラインが現実的な対象として浮かび上がって来た。

南峰、中央峰、主峰を8,500mの高みで縦走するという困難な目的のために5年間の準備活動を進めてきた幾人かのメンバーにとって、それは耐えることの出来得ないような失望であった。

しかし、計画を実施する目前であるこの時期に政治(ネパール)と経済(外部資金)の厚い壁に立ちふさがれている以上、二つの内の一つを選ばなければならなかった。それは、縦走の放棄か、(W)～(M)間の縦走であった。

登山の側から考えれば、8,000m以上の高みにおいて酸素ボンベなしの荷上を強いられ、縦走ライン自体は刃のような稜線となっている(W)~(M)縦走計画は(S)(C)(M)三山縦走に勝るとも劣らない困難な登山となることだろう。

現地へ入った時点で或いは(S)(C)のオープンがあるかも知れないが、その時は、(S)(C)の役割は縦走とは違ったものとなって我々に舞台を提供してくれることだろう。

このEXPに参画したメンバーの多くが望んでいること、それは「自己燃焼」と「自己完結」の上に成り立つ(W)~(M)8,500m峰縦走登山の成功である。

■計画の概要■

1. 名称 日本カンチェンジュンガ遠征隊 1981
英文 THE JAPANESE KANGCHENJU
-NGA EXPEDITION 1981
略称 (JKE-81)
2. 主催 日本ヒマラヤ協会
3. 後援 文部省 (社)日本山岳協会
4. 目的 カンチェンジュンガ山群における8,500m峰の縦走登山
5. 構成 総括1名 隊長1名 副隊長1名
登攀リーダー3名
登攀隊員15名 医師1名 小計22名
リエゾンオフィサー1名 サーター2名
ハイポーター16名 ベースキャンプ要員5名 小計24名 総勢47名
6. 留守本部
東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号 〒160
日本ヒマラヤ協会
7. 現地連絡先
JKE-81
C/O EXPRESS TREKKING(P)LTD
NAXAL BHAGABATI BAHAL
P.O. BOX 339
KATHMANDU
NEPAL
(PHONE 13017)
(GRAM GREATREX)

8. 日程概要

- | | | |
|---------|-----------------------------|--------|
| 1980.12 | 第一次先発隊成田出発 | }通関・輸送 |
| 1981. 1 | 第二次先発隊成田出発 | |
| 2. 1 | 先発隊4名成田出発 | |
| 2. 11 | 本隊15名成田出発
先発隊7名キャラバンスタート | |
| 2. 14 | 後発隊1名成田出発 | |
| 2. 24 | 本隊16名キャラバンスタート | |
| 3. 15 | 先発隊ベースキャンプ建設 | |
| 3. 20 | 本隊ベースキャンプ入り
C1建設 | |
| 3. 26 | C2建設 | |
| 4. 2 | ABC(C3)建設 | |
| 4. 14 | C4建設 | |
| 4. 24 | C5建設 | |
| 5月上旬 | 縦走実施 | |
| 5. 25 | ベースキャンプ撤収 | |
| 6. 5 | イラム着 | |
| 6. 10 | カトマンズ着 | |
| 6. 20 | 本隊日本着 | |
| 6. 30 | 後発隊日本着 | |

9. 目標の山の概要

中国との国境から南に走る長大な国境は、ネパールとインドを分け、その北半にカンチェンジュンガの大山塊がそびえている。主峰の位置は緯度



としては奄美諸島とほぼ同じである。

主峰(8,598m)から南に続く主稜上に中央峰(8,496m)南峰(8,490m)があり、西の主稜上に西峰・別名ヤルンカン(8,505m)がある。

周辺には大きな氷河が発達し、見事な氷河地形を形づくっている。すなわちネパール側では、カンチェンジュンガ氷河・ヤルン氷河、インド側にはゼム氷河・タルン氷河である。

大ヒマラヤの東部に位置し、ベンガル湾に最も近い8,000m峰であるため、モンスーンの影響を最も長く、かつ激しく受け、他に例を見ない気象条件下にある。

また、インド側においては東西わずか数十キロメートルの間で、実に標高差8,000m以上の起伏を示す特異な地形をなしている。

地勢・気象条件は、地理的位置と相まって、動植物をはじめとして、多くの興味ある研究対象が存在し、自然科学上の宝庫といわれている。

10. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会カンチェンジュンガ遠征実行委員会

会長 柴田金之助

副会長 山倉洋一・稲田定重

実行委員長 清水 澄

副実行委員長 西郡光昭

事務局長 山森欣一

常務委員 菊地 薫、五百沢智也、角田不二、岩水竜峰、八木原暎明、尾形好雄、

事務局 〒160東京都新宿区高田馬場3-23

-1 淀橋食糧ビル506号

11. 隊員名簿

総括 清水 澄(45才) 原山岳会

1971 ガンガブルナ隊長 1975 リンバハール隊長

1976 マナスル

隊長 山森欣一(37才) 山嶺登高会 1975 ヌン副隊長 1978 ハチンダールキッシュ副隊長 1980 カンチェンジュンガ偵察隊長

副隊長 菊地 薫(35才) 福島県こ

まくさ山岳会 1974 ラムジュンヒマール 1980
カンチェンジュンガ偵察副隊長

登攀リーダー・装備 八木原暎明(34才) 群馬ミヤマ山岳会 1972 ダウラギリIV 1975 ダウラギリIV 1978 ダウラギリI

登攀リーダー・輸送 保坂昭憲(35才) 福島県こまくさ山岳会 1975 ヌン

登攀リーダー・食糧 尾形好雄(32才) 雪と岩の会 1974 ツクチエピーク隊長 1978 ヒマルチュリ隊長 1980 ケダルナート隊長

隊員・食糧 飛田和夫(35才) 立峰山岳会 1978 トリスル

隊員・装備 若尾巻広(31才) 諏訪山岳会 1979 マッキンレー 1980 カンチェンジュンガ偵察

隊員・輸送 渡辺 優(31才) 横浜蝸牛山岳会 1977 K2 1977 ムルキラ 1978 ハンター 1979 ラトックI 1980 ジュトマルサール

隊員・酸素 山田 昇(31才) 沼田山岳会 1975 ラトック 1978 ダウラギリI 1980 カンチェンジュンガ偵察 1980 ケダルナート副隊長

隊員・装備 藤倉和美(31才) 雪と岩の会 1974 ツクチエピーク副隊長 1978 ヒマルチュリ副隊長

隊員・記録 八嶋 寛(31才) 仙台山岳会 1975 アンナプルナサウス 1978 ヌン 1978 トリスル 1980 カンチェンジュンガ偵察

(神田食品研究所)

隊員・装備 佐久間隆(30才) 東京白稜会 1976 ハンチングトン

隊員・食糧 小松 伸(30才) 酒田労山

3013 (果樹園)

隊員・食糧 福山 茂(30才) 日本岳友会
1974 ヴァリス 1978 モンブラン

隊員・梱包 片岡邦夫(27才) 法大II部山岳部OB会
1975 マッキンレー 1979 ルプガルサル 1979 ディオチパ 1979 チュルー 1980 カンチェンジュンガ偵察

隊員・酸素 角田不二(28才) 明大駿台山岳部OB会
1978 トリスル 1980 カンチェンジュンガ偵察 1980 ケダルナート

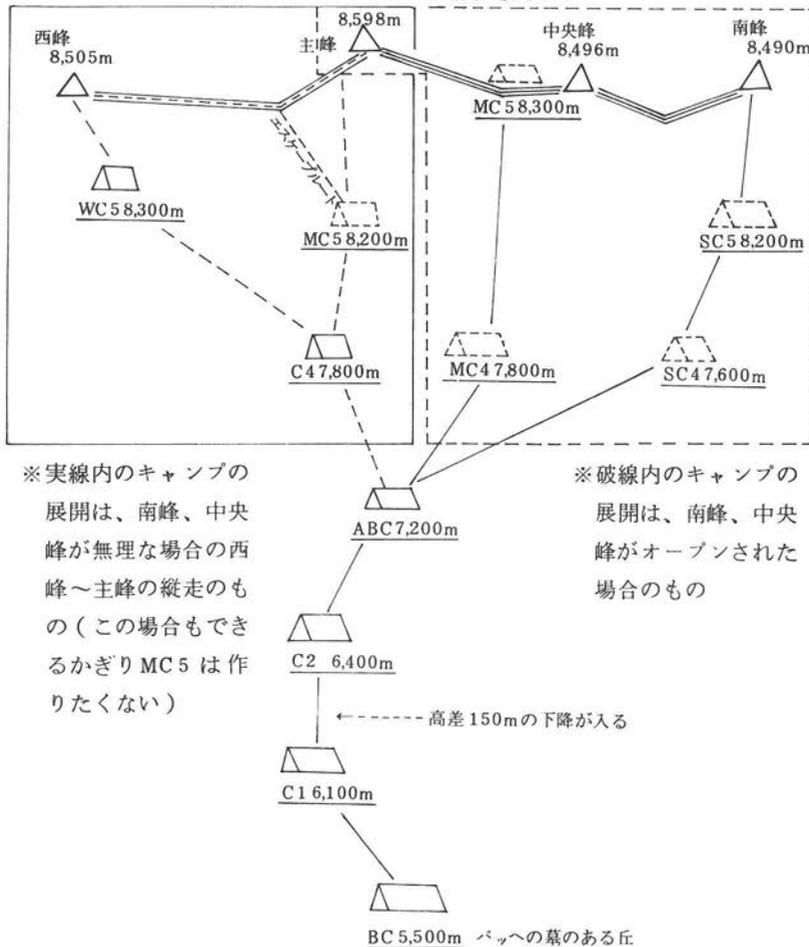
隊員・食糧 鈴木 茂(26才) 大田山岳会
1978 ダウラギリ I

隊員・通信 谷岡俊匡(28才) 無所統 1977 インドラサン

隊員・記録 鈴木治三郎(25才) 横浜蝸牛山岳会 1978 ハンター

隊員・記録 二階義治(27才) 大阪凍稜会

カンチェンジュンガ縦走計画



※行動用酸素は縦走隊及びサポート隊のみ使用する。

※睡眠用酸素はABC、C4にそれぞれ初めて宿泊する日のみ使用する。

※医療用酸素はBC、C1、C2、ABC各5本を配置する。



■ ルート ■

ヤルン氷河右岸の台地（通称・パッへの墓の丘）に設置されるベースキャンプからABC（第3キャンプ）までは、高差1,700mにおよぶかなり激しく流動するアイスフォール帯があるが、下部アイスフォール（約700m）はハンブ稜の側壁を使うことによりエスケープできる。危険性はあるがさほどの困難はないと思われる。第1キャンプから第2キャンプの間では一担ハンブ稜を懸垂下降しなければならない。

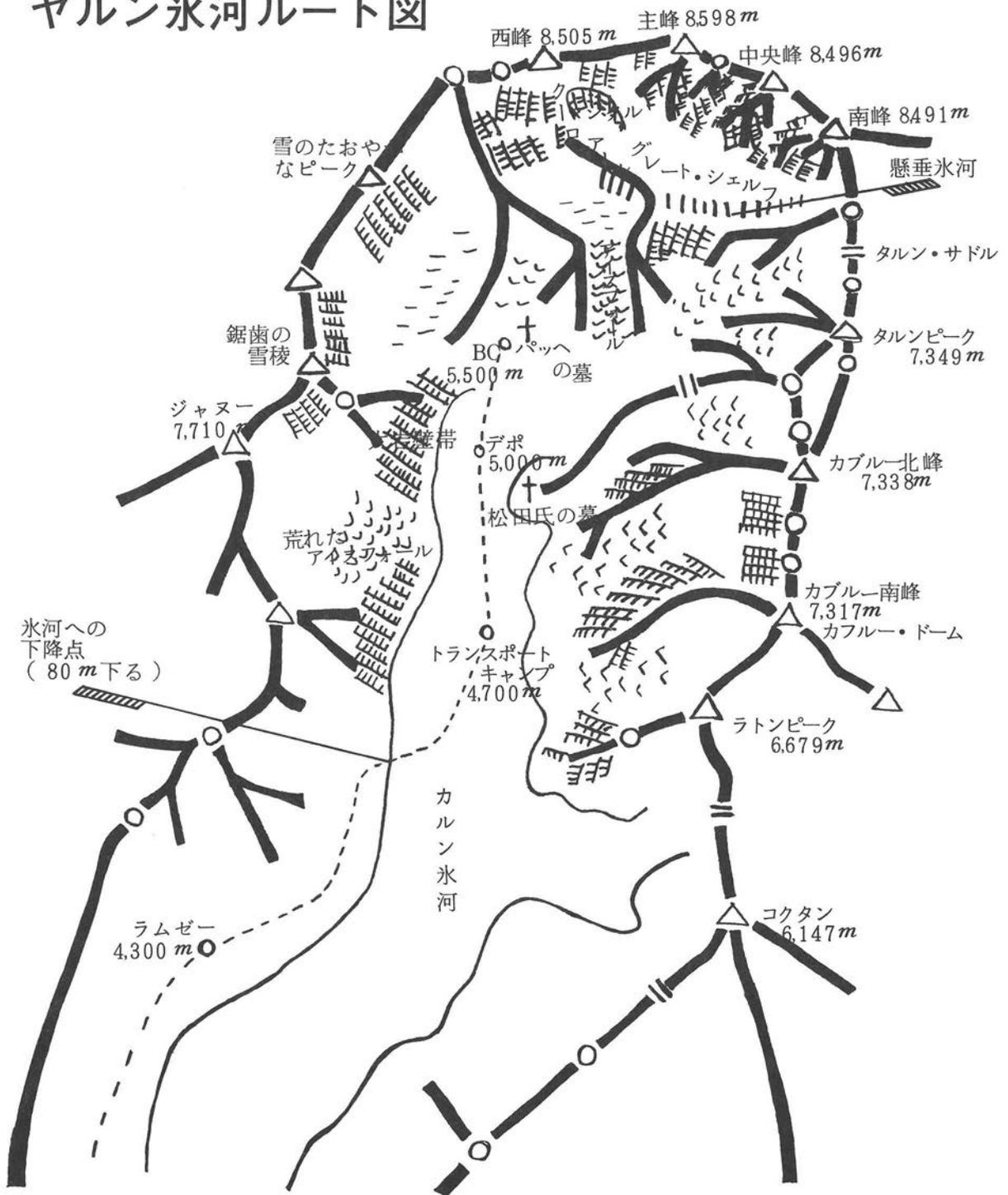
アイスフォールを突破すると、グレート・シェルフと呼ばれる氷河の函養域に達する。これより

主峰の初登ルート上に第4キャンプを設ける。ここからシクルと称される馬蹄形をした雪田を大きくトラバースして縦走隊は、ヤルンカン南壁を一気に頂上まで突き上げていくクローアール上にファイナルキャンプを設ける。

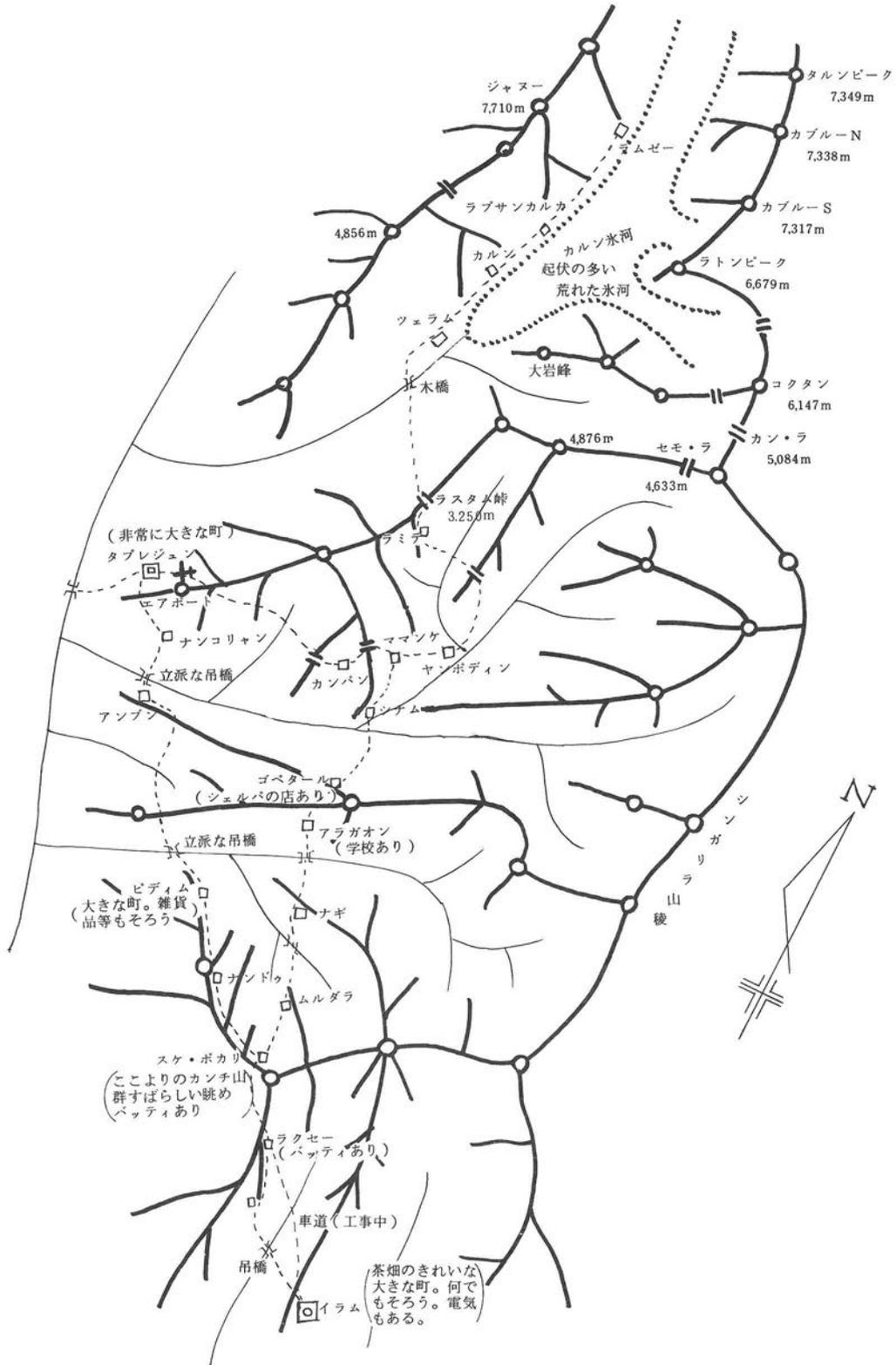
ヤルンカン頂上から主峰までは、刃の様に鋭い稜線が続き、主峰とのコルからは傾斜の強い稜線となり、強い意思が要求されるだろう。

人間が経験した8,000m峰は頂上へタッチして帰る往復登山のみであり、8,500mラインでの縦走は全くの未知の領域である。その困難度は言語に絶するものがあり、生体の生存にとって極限の条件と言えよう。

ヤルン氷河ルート図



キャラバンルート図



寄贈図書一覧

(昭和55年12月20日現在)

HAJでは、これまで多くの方から貴重な報告書、研究書、資料等々を御寄贈いただきました。誌面を借りて、厚く御礼申しあげる次第です。いただいた書物はルームにて会員のえつらん、及び協会活動に非常に役立っております。今回は事務局を東京に移して以後の寄贈図書を発表させていただきます。カッコ内は寄贈者名と日付。

- ◎友情はマナスルを越えて — IRAN・JAPAN MT.MANASLU JOINT EXPEDITION 1976 (長野県山岳協会・清水澄氏 54. 4. 1)
- ◎MT.MACKINLEY登頂報告書1978 (長崎大学学士山岳会 本多夏生氏 54. 6. 21)
- ◎秘境ムスタン潜入記(高橋照氏 54. 12. 14)
- ◎神々の山河 — インドヒマラヤ研究3(長野県勤労者山岳連盟 55. 2)
- ◎Rolwaling・Himal Konde・Ri 報告1978年(慶応義塾大学アルペン・フェライン岳酔会 55. 2)
- ◎TUKUCHE PEAK 1974 ツクチェ・ピーク登山報告書(雪と岩の会 尾形好雄氏 55. 2)
- ◎長野県山岳協会年報1970年度、1973年度、1978年度(西郡光昭氏 55. 2)
- ◎青と白の厳しさ DHAULAGIRI-IV、1972(群馬県山岳連盟 八木原罔明氏 55. 3. 8)
- ◎ラトックIII 1979(広島山の会カラコルム登山隊 寺西洋治氏 55. 7. 17)
- ◎チョゴリザ 1979(秋田県山岳連盟カラコルム登山隊 55. 7. 28)
- ◎DODA6550 —ヒマラヤ遠征報告書—(東洋大学体育会山岳部 55. 7. 30)
- ◎創部20周年記念アンナプルナヒマール遠征報告書(大阪歯科大学体育会ワンダーフォーゲル部OB会 55. 7. 21)
- ◎ホワイトセール敗退の記録1978年(函館イン

- ドヒマラヤ遠征隊 55. 7. 11)
- ◎プタヒウンチュリ西稜 1976年ポスト・モンズーン(日本岩登協会第2次ヒマラヤ登山隊)
- ◎ガンチェン登山報告書 — 2,000人の協力の記録 — (仙台一高山の会カラコルム登山実行委員会 55. 7. 18)
- ◎シャルミリ&ランダック・ザンスカール踏査(1980年群馬県教職員インドヒマラヤ登山隊)
- ◎ルプガル・サール HMC・KE79(法政大学2部山学部OB会 土居正勝氏 55. 8)
- ◎白き山嶺DHAULAGIRI-V 1971(県陵山岳会 55. 8. 4)
- ◎峭峻の白き尾根 DHAULAGIRI-I-1978 South East Ridge(群馬県山岳連盟 八木原罔明氏 55. 9. 24)
- ◎MANASLU WEST WALL 1971(日本マナスル西壁登攀隊 高橋照氏 55. 10)
- ◎SECRETARY OF MANASLU-P29 登山報告書(兵庫県山岳連盟 岡田和泰氏)
- ◎未知なる頂へ ビンドゥゴルゾム登頂報告書(ズビダーニエ同人 坂原忠清氏)
- ◎ヒンズー・クシュ、カラコルム研究誌、ヒンズー・クシュ、カラコルム登山探検誌(日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議 高木泰夫氏)
- ◎LAMJUNG HIMAL 6,393m(高知県山岳連盟 国沢鎮雄氏)

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)各地の社会情勢、現地事情(入山事情)、登山隊の動勢など。

紀行 遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれをとり囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

日本からヒマラヤから ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、HAJや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

◎送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

遠征学入門

XXI

実践篇

タクティクスについて(4)

清水 澄

担 荷 量

ヒマラヤの様な高度の高い山岳での長丁場の登山では、疲労を蓄積しないことが大切である。一担たまった疲労はなかなか抜けないばかりでなく、順応にも悪い影響を及ぼす。従って行動時間ばかりでなく、担荷量も加減をしなくてはならない。キャラバン中からでも、かなりの荷物を担ぐのが良い様にも言われるが、疲労を蓄積してベース・キャンプに到着したのでは、高所順応のスタート地点でハンディを背負うことになってしまう。確かに負荷をした方が順応は早いのであるが、疲れ過ぎは逆に順応を遅くらせるのである。

担荷量については、毎日々々背負うのであるから、長続きのする重量にとどめなくてはならない。しかし能率を落す訳にもゆかないので、出来る限りの量は背負うべきである。日常のトレーニングと山行中の練成が物を言うことになる。

キャラバン中は調整期間と考え、15kg~20kgの担荷が良い。登山期間中は、その隊の隊員の担

荷レベルと、登山方法の考え方で決定すれば良い。大方は第1ステージ(BC~6,500m程度)では20kg、第2ステージ(7,500m程度まで)では15kg、第3ステージ(7,500m以上)では10kgが目安となる。

高所ポーターの担荷量は、これとは別に定める。ネパールでは登山規則によって、高所ポーターの担荷量を定めている。彼等の健康管理のことを考えれば、これも妥当なことと思う。参考までにそれを記すと、

5,000 m~6,000 m	20 kg
6,001 m~7,000 m	17 kg
7,001 m~8,000 m	14 kg
8,000 m上	12 kg

となっている。さしせまった必要のある場合は、これに5kg以内の増加が出来ることになっている。過去の隊の実例をみても、この程度かそれ以下だった隊が多いので、実効上も問題はないであろう。

休養日について

担荷量を加減しても、毎日々々休みなしで行動していたのでは、やはり疲れてしまう。適度に休養を取り、英気を貯えなくてはならない。体力維持、健康管理、高所順応の面でもこれは大切である。

何日に一度休養をとるか。これも隊員の強さ、登山期間の長さ、タイム・リミットへの余裕、天候と補給、登攀との関連、登山への考え方、等々で決定される。一般に3日行動の1日休みとする隊が多い様である。これだと順調ならば75%の稼働率となり、ヒマラヤ登山としては高い率である。実際には悪天ストップ、体調崩れ等で更に休養は多くなるのだが。

4日行動の1日休み、5日行動の2日休み、その他いろいろな組合せが考えられるが、疲労が蓄積しないうちに休養することがコツと云える。低稼働率の方が隊員の故障は少ないので、最初から酷使しなくてはならない様な計画は慎むべきである。

休養はなるべく低いキャンプ、出来ればベース・キャンプでとる様にしたい。当然のことながら低酸素ではよく休まらないので、ところが、低所

のキャンプまで下りていたのでは、往復に日をとられ、3日に1日という原則が守れなくなって来る。その場合は休日を2日にするとか、中間キャンプで休養する等の手を打つ。筆者の体験からいくと、低所まで下りた場合は登りかえさなければならぬので、休養は2日は欲しい(7,000 mからBCといった例)。この時、中間キャンプ(前進ベース、6,500 m等)で休養すれば、1日でも結構良いが、それを何回も繰り返すことは良くない。やはり時にはベース・キャンプまで下って、真に疲労をいやしたい。

とにかく隊員は、下へは下りたがらないので、折にふれて下へ降ろす努力をしなくてはならない。隊員1人々々の行動を折れ線グラフに記録して、休養といえども高所滞在が長くならない様にすべきである。

高所ポーターについては、隊員と同レベルで休養を与える程の必要性は感じないが、適度の休養はなくてはならない。ポーター頭との話し合いで休日を定める。彼等の志気の面で政策的には、隊員と同程度の休日となる様である。休日でも賃金はカットされない。

ローテーション

個々の隊員の稼働と休養の関係を、隊全体として運行するのがローテーションである。いずれかの隊員が休養している時に、隊としては稼働が止らない様に、他の隊員を行動させるのである。ローテーションはまた、高所順応の上でも非常に重要である。総ての隊員が揃って同程度の順応を獲得する為に、同じ様に最前線で働く機会を与えるのである。

ローテーションは隊員の働き場の輪番であるから、隊員を幾つかのグループに別ける。1グループは2~4人程度が動き易い。隊としては3~5程度のグループが作られる。これらのグループが順番に回って、前線でのルート工作、荷上げ、休養等を繰り返すのである。従って基本的には単純である。体調を崩した者が出ると、そのグループから脱落するので、補充で他のグループから移動させたり、回復後の復帰で、グループ相互のコンバートが起り、隊員個々の動きは複雑となって来

るのである。

総てのグループが一様に最前線に出ることは、一様に順応していく上で大切である。しかしそれも中期までで、故障者が続出したり、うまく順応出来なかったり、荷上げに追われたり、最後はローテーション出来なくなってしまうことが多い。隊員が一様に順応することは、アタック・メンバーの機会を広くする上で重要なばかりでなく、隊総体としての進展のスピードからも重要なのである。

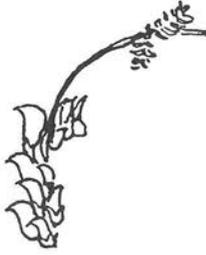
隊によっては、最前線に出てルート開拓と工作を行うグループを2つ程に限定してしまい、他のグループは荷上げ専従とすることもある。こうなると隊員にはっきりと序列が出来てしまい、順応の面でも荷上げ組の方が一段下になってしまう。最初からアタックに加われない隊員を作っている様なものである。隊員間の力量の差が歴然としている場合は、これでも止むを得ないのかも知れないが、理想とは云いがたい。

ローテーションでは、最前線に出ているグループ以外は荷上げを行っている訳であり、また休養しているグループもある。この3つの部署を回る順序は、荷上げ→工作(最前線)→休養とすべきである。最前線は最高所であるので、下部の者よりも疲れが酷いと思われるし、順応からも高所からは一気に休養地点まで下った方が有利だからである。登りながら荷上げをして前線に到着し、ルート工作・開拓をしてまた下るとするのが合理的でもある。

さて最初からローテーションのグループに入らずフリーとする隊員もある。これは主として、管理、作戦に当るもので、登頂の機会を考えない人達である。大きな隊になればなる程、この種の隊員も多くなる。

もともとローテーションは特定の者に負担をかけない様に、全員が均等に仕事を受け持ち、全員が良好なコンディションを保つ為に考え出された方法である。誰かが休んでいても、隊としての前進は止らないし、誰もが自己の体調を最高に保って、隊の能率を保持する訳である。

皆が最良のコンディションで、同じ様に仕事を分け合うことが、チーム・ワークの増進にもなる。



花を求めて(6)

水野 勉

ヨーロッパ人はかなり早くから中国へキリスト教を伝道しようと努めていたが、中でももっとも熱心で、真の推進力となったのはフランス人であった。無関心な人びとの間に入って、自己犠牲的精神で伝道に従事した宣教師たちの物語はいつかまとめられるべきであろう。これは歴史上においては、幾多の探検家の物語にも劣らない、いや、それ以上に苦難に充ち、勇気を要する仕事の叙事詩であろう。探検と限定しなくても、他に比すべきもないくらい苦難の歴史であったにちがいない。旅行者もなく、コミュニケーションも殆んどない時代に、チベット辺境や雲南北部の山々の間での生活がどんなにきびしく、寂寥たるものかは想像できるであろう。

英国人旅行者 A. E. プラットは、打箭炉の先でジェリド神父に会ったときのことを回想しているが、神父がずっと孤独の生活をしていて、同僚の神父を除けば 13 年間も全くヨーロッパ人に会わなかったと述べている。また、四川と雲南との境にいた別の宣教師は、忘れた頃に訪れる仲間の宣教師を除けば、30 年間もヨーロッパ人に会わなかったことを書いている。

フランス人が海外で採集した植物標本も膨大なもので、自然博物館 Museum d' Histoire Naturelle やジャルダン植物園 Jardins Botaniques の倉庫には未だに整理されない植物標本がそのままにストックされているそうである。

ジャン・ピエール・アルマン・ダビ(1826—1900)は中国で最良の年月をすごした、すぐれたナチュラリストだった。かれは 1860 年戦争が終結したときに中国に着いた。それで自然史が殆んど知られていない土地で、思う存分自由に仕事をすることができた。ダビ神父がこの広大な白いキ

ャンバスに思うがままに描けて幸運だったとすれば、中国の自然史もまた、この豊かな教養を身につけた、冷静で、偏見を持たない、すぐれた観察者を見つけたことで幸運といわねばなるまい。

ダビの仕事をみるのには、その全体像をとらえねばなるまい。かれが自然科学のあらゆる分野に通曉していたからである。民族学ノートがすぐれているし、地理学的、水系の観察も正確であった。また、すぐれた地質学者であり、鉱物学者であった。また、中国でのもっともすぐれた動物学者の 1 人であったし、植物採集者としても一流であった。その上、かれは魅力的な人間で、自分の豊かな知識を誇示したり、自ら高ぶることを常に恐れていて、つねに学ぶ欲求を持ち、疑問を心に投げかけていた。

ダビは 3 回にわたる大探検旅行をおこなった。第 1 回のモンゴル旅行は植物学的には重要なものではない。1868 年から 1870 年にかけての、2 年以上にわたる第 2 回の旅行はじつに重要である。チベット国境に近い山岳地帯への最初の学術的な旅行だったからである。この旅行はチベット辺境のおどろくべき植物へと、植物学者や園芸家の目を開かせたのである。北京から、かれは揚子江岸の重慶へ、そこから四川の首都、成都へ行き、それから 1869 年 2 月 22 日にムピン馬辺に着いた。ムピンはチベット国境にある半独立の地方で、未開のマツ族が住んでいた。

ムピンで、ダビは若い宣教師 M. デュクリテが教えている、ミッション・エトランジェによって開かれていた小さい学校を根拠地とした。これはヨーロッパ人が中国と接触する際に起った奇妙な対応の一例であった。長い間、このミッションは四川にいくつかの根拠地を持っていたが、19 世紀

のはじめ頃、宗教的迫害がひどくなったので、ムビンのマンツ族の王に庇護を求めねばならなかった。それ以来、そこに本部を設け、この辺境の地にかくれ住むようになった。そして、一方、中国はますます反ヨーロッパ的になった。

ダビは2月から8月までムビンに滞在し、後になってウィルソンによって紹介される多くの植物を発見したが、秋には去ったので、それらの種子を採集することはできなかった。

かれの調査した主な地域はホン・ジャンティンといわれる5,000メートルにも達する山塊であった。3,000メートル附近まで山腹は樹木がぎっしりと生えており、大体が針葉樹で、ジャクナゲがその間に美しく色どりをそえていた。この山塊にはジャクナゲが豊富であった。ダビはほんの狭い地域でも16種以上の植物を発見した。

成都に戻ったとき、ダビは病人であった。多くの学者と同じように、かれは庭園よりも植物標本に関心を持っていた。かれがこのわずか6ヶ月間に発見した一級品の植物の数はおどろくべき程多かった。

かれの第3回の旅行は1872年から1874年にかけておこなわれたが、かなりの時日、身体の不調であったので、最後にはフランスへ帰国する破目になった。この旅行は前とちがってもっと中国の中央部をとったもので、陝西の首都、西安から近い山々の踏査を除けば、植物学的には重要性はない。

ダビは一地方に腰を落着けて仕事をする最初の植物採集者の一人であった。それ以前のたいいの旅行者は、特に気に入った土地に1日か2日ぐらい止まるだけで、あとは通過してしまうのが普通であった。長年の間、広大な地域が非常に表面的に探査されてきたということは残念なことであった。いずれ、その踏査はやり直さねばならなかった。チベット国境で、ダビはムビンの附近に的をしぼって賢明に、しかも徹底的に仕事をしたのだった。もし、この辺境地帯をあちこちと歩き廻っていたら、かようにりっぱな成果をあげることができなかったであろう。

西安近くの秦嶺山脈においても同じ原理で仕事をした。西安の南西の袁家庄という村(高度約

1,500メートル)を2ヶ月間根拠地とした。

1873年おそくに、かれは江西で仕事をした。主として廣昌府と福建省との間の丘陵地帯で、30年以前にフォーチュンによって探査された茶の地帯と同じ様相をして、樹木が濃く茂り、種類の多い地域であった。ダビはふたたび病を得て、上海までやっと戻った。かれは1874年にフランスへ帰国し、中国へはふたたび戻らなかった。

ダビはたしかに中国の植物誌に関するヨーロッパの知識に基礎を築いた。それも見事にやった。しかし、かれの主な興味はたぶん動物学であって、植物学は二次的関心であったろうと思う。

その踏査した地域の広さおよび中国の植物誌に関するかれの豊かな知識のために、ダビ神父が重要な植物採集者とするならば、ジャン・マリ・ドラヴェ(1834-1895)は、植物採集をしたフランス人宣教師のうちで、もっとも組織的かつ徹底した採集者である。かれはダビと同じエトランジェ・ミッションに属していた。

かれは1867年に中国に渡り、広東附近にいたので、前述したハンスの採集者の一人となった。そして、休暇でフランスへ帰ったとき、ダビに会い、採集した植物をパリへ送るように助言をうけた。ドラヴェの植物採集が非常に大量であったので、パリ博物館にとってもあまりに多すぎて、50年後になっても、その多くが手が着けられず未整理のままであった。有名な生物学者フランシエが述べているが、ドラヴェの採集した標本は最良のもので、よく処理されていて、美しいとさえいえるものであった。その上、ドラヴェのフィールド・ノートは明晰であり、詳細を極めていた。

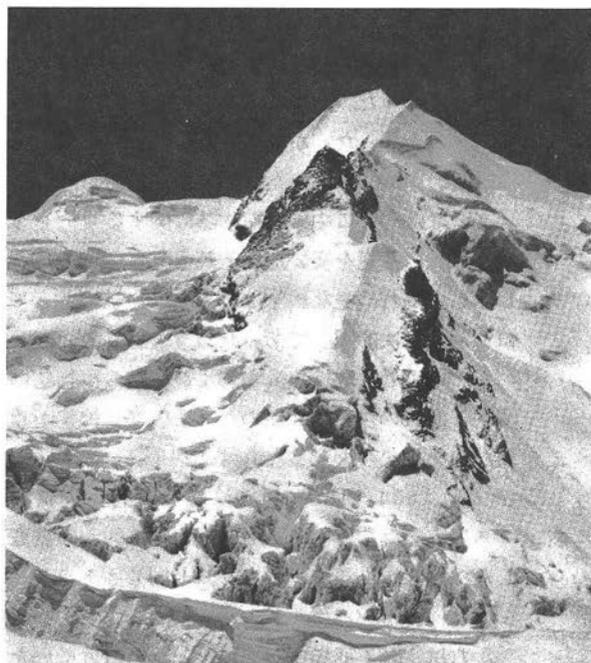
かれはこれらの採集を自分一人でおこない、その徹底したやり方は非の打ちどころがなかった。かれは幸いなことに、大理の北東にある丘陵地帯、すなわち大理と麗江との間にある地域に10年間住んでいた。そこは北西雲南のもっともすばらしい植物の宝庫といってよかった。それで、ある定まった場所にいつでも訪れ、花と実を採集することができた。近くにツェメイ山という山があって、ここをかれは庭園あるいは雲南のモンブランと呼んでいた。

山

5930 m

ラムドゥン

岡 秀 郎



▲ラムドゥン（左奥）とP5870（右手前）

ロールワリン山群は、ガウリサンカル、メンルンツェの7,000 m峰と数多くの6,000 m峰の集まりであるが、その大半の山々がロールワリン・コーラの北岸に連なっているのに対し、ラムドゥン峰はその南岸に位置し、トレッキングルートからも望むことはできない。また、ラムドゥン峰の北東にチェギゴ(6,259m)があるが、その他周囲のピークは全て5,000 m級であり、中国国境付近に較べると地味である。

キャラバン（4月1日～4月9日）

キャラバン終了点ナンガオンへは9日間を要した。ルートはロールワリン山群の西、スン・コシ沿いのバラビゼに始まる。カトマンズからバスで4時間40分、中国国境に約26キロの地点である。バラビゼを出ると、その直後の尾根の登りとジャリジャレからの峠越え以外、顕著な登りはない。

4日、チャリコットでロールワリンの白い山並に出会い、ポータ・コシの右岸に降り立った。そのまま、右岸の長閑な林道を進み、スリドバン手前で左岸へ移る。その後、シムガオンまでにポー

タ・コシを2度渡るが、これを含めて渡河は全て橋による。

ロールワリン・コーラ出合を避けて、シムガオン前後の登りを終えると、コーラ左岸に降りるべくトラバースが続き、やがて尾根付きの木橋が現われる。激流を下に右岸に移り、緩やかな登りを行う。南側の山に雪が現われ、樹林も消えかけてくる。

ベディン辺りになるとチェギゴの尖峰が顔を出し、一気にヒマラヤの様相を表わす。ラマ教の読教を後に、右岸の開けた牧草地を進み、9日目、6,000 mの国境稜線直下、石垣と石積みの民家をなだらかに抜けたナンガオンに着いた。

アタックキャンプへ（4月12日～4月18日）

ナンガオンで地元のポーター2名を雇い、シェルバと我々2名の計5名でラムドゥンを目差した。（5,500m地点でポーター1名を解雇）村外れの木橋をコーラ南岸へ渡り、約1時間、チョブジェを仰ぎ見るころにヤルン谷出合の巨岩を見出す。C1（4,360m）は近所のカルカに置いた。



ACより北を望む。ハーガン(左奥)、P5940(中手前)、チョブジュ(右)

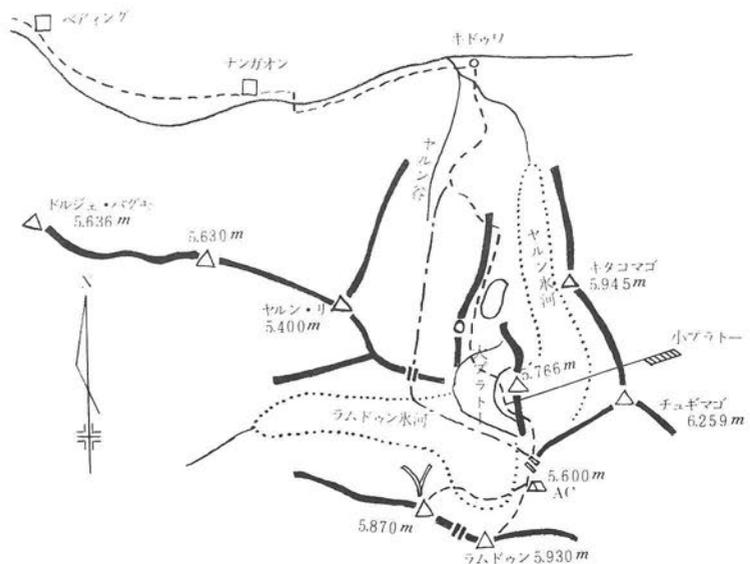
C1から草付の踏み跡を辿り、ヤルン谷下部中央を走るうず高い尾根に取り付き、途中、尾根左側の雪面をトラバース気味に登り、尾根の消滅した苔の台地に出る(C2, 4,700m)。雪は柔らかく日本の五月山を想わせる。C2から上部のスノーヒルを右から巻き、プラトーに出る。その後も同じ様なスノーヒルを直登、次のプラトーに出た(C3, 5,200m)。ここでラムドゥン峰北西のピーク(5,870m)上部が現われる。

C3からは、ヤルン・ラの東から北へ延びる尾根を目差し、その末端の雪の斜面に登り尾根を乗越し、ヤルン氷河側へガラ場を20mほど下降する。その後は尾根東側を南へトラバース。左側にはヤルン氷河との間に凍結した池がある。およそ200mのトラバースが終ると、前方には雪の斜面が現われ、それを尾根寄りから左斜上に登る。傾斜が緩くなると5,766mピーク西側の雪原である。C4(5,500m)は雪原のピーク寄りに置いた。C4から、ピーク南西面に張り出た雪の斜面を登る。ピークの基部をすり

抜ける恰好である。ここで初めてアイゼンを付け、クレバスに注意しながら進み、ピーク南稜の西側に出る(C5, 5,650m)。

C5からは南稜を乗越す。堅雪の急斜面約15mにザイルを使用し、アイゼンを付けた。尾根上に出ると、チュギマゴ側は傾斜も緩く、5,650mのコルまで雪面が続く(C6=AC)。

当初ルートは、C2からヤルン・ラを越え、ラムドゥン氷河を経るものであったが、ラ直下の急斜面、未知の氷河の危険を考慮し、シュルパの主





▲P5870頂上よりガウリサンカール(左奥)を望む

張する上記のルートを採用した。

アタック(4月19日)

ポーター1名を残し、3名でアタック開始。A Cからのラムドゥンは雪の円錐台とその上部のスノードームである。登頂ルートは、円錐台状の雪の斜面の北寄りに登り、ドームの北側に出、その雪壁をトラバース気味に右上するように採った。

下部の雪面はノーアイゼン。約150mの登りを終えるとドーム下のテラスとなる。アイゼンを付け、テラスのヒドゥンクレバスに注意し、50mザイルを出す。広いテラスを通過しドーム雪壁を右斜上に約20m登る。続いて40mのフィックスを終え、直上約30mで小テラスとなる。ここから約10mの雪壁を登ると、雪の広い頂上が見えた。最高点は南側に控えている。11時20分、3名は雪の高見を踏み、エベレントからゴザインタンまでの

白銀の山並を楽しんだ。

5,870mピーク(4月20)

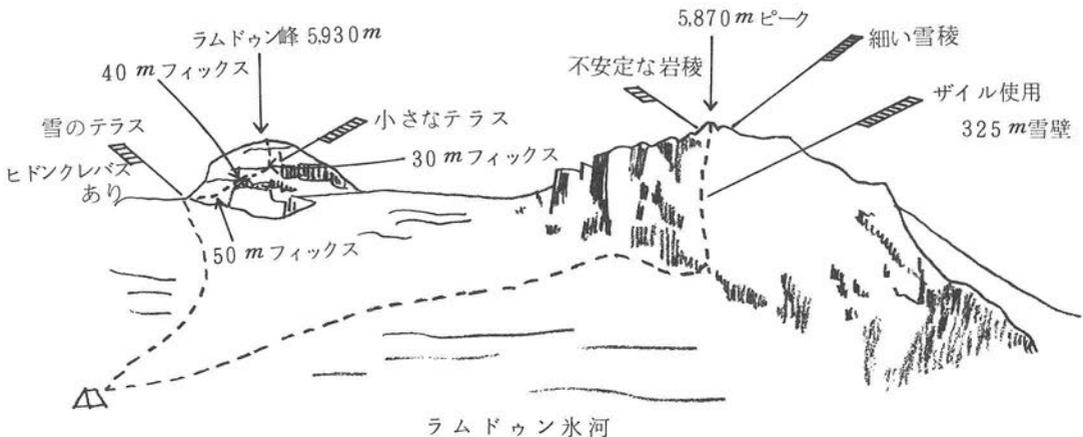
昨日に続きラムドゥン峰の北西に座する5,870mピークにアタック。このピークはラムドゥン氷河が北西から西へ屈折する地点の南に位置する、雪の台形状のものである。

A Cから氷河上部を南へ向かってラウンドし、ラムドゥンからこのピークに連なる雪線が岩稜になる下辺りで、西に折れた。ルートはピーク北面、頂上にダイレクトに上る大雪壁の左寄りである。

(後にこの頂上は最高点でないことが判る。)

ルートの最初は右に雪壁、左に岩帯のあるコンタクトラインで、上部3分の2は全て雪壁の直登である。1ピッチ目はロックハーケンでピンを取り、岩帯を避けて右から回り込むように雪面に出る。2、3ピッチ目は左斜上にそれぞれ50mのフィックス。その後は、スノーバーを打ち抜きしながら180mのフィックスで直登、雪稜状の狭いピークに出た。実際の最高点はラムドゥン側の岩稜上にあつたので、不安定な浮き石の上を進み、15時に頂上に立った。

なお、ヤルン谷からラムドゥンへのルートであるが、ヤルン・ラ、ラムドゥン氷河を経るより、我々の採ったルートの方が安全であり、装備も少なくて済む。実際のフィックス総計は、ラムドゥン峰約120m、5,870mピーク約320mであった。スノーバーは前者で3本、後者で5本を使用するにとどまった。



ラムドゥン峰の記録

1952年秋、トム・ワイヤーはじめ4人の英国隊がポータ・コシからロールワリンに入り、コーラ南岸の雪峰、岩峰に登頂している。この中にラムドゥンが含まれているかは明らかでないが、55年には、A・グレゴリーを中心とする5人の英国人が、ベディングを基地に6,000 m前後の山19座に登った。この中にラムドゥンが含まれており、

第2登である。5,870 mピークもラムドゥンに極めて近く、小登山には恰好のピークであるため、それら19座の1つである可能性は高い。

ともかく、ラムドゥンは、ロールワリン・コーラから南へ外れ、6,000 mに満たず目立たぬため、この山群の中で「孤独」を感じさせる雪の小ピークであるようだ。

(おか・ひでお 大阪市大山岳部)

新入会員 昭和55年10月29日～12月18日

会員番号	氏名	入会年月日	〒	住	所	電	話
1474	大澤 清美	55.10.29					
1475	中山 松夫	10.29					
1476	佐々木一夫	10.30					
1477	土方 浩	11. 8					
1478	中村 武昭	11. 8					
1479	植田 宗男	11.15					
1480	青木 正樹	11.30					
1481	本田 荘八	11.30					
1482	中江 啓介	12. 1					
1483	古橋 隆一	12. 6					
1484	山下 健夫	12.10					
1485	高井 勝夫	12.18					

「ヒマラヤ」表紙写真募集

《規定》

- (1) モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2) 被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。山とは限りません。山麓の風物でも結構です。
- (3) 未発表であること。
- (4) 未知の地域の写真、あるいはあまり知られて

いない角度からの写真を期待します。

- (5) 採用分には全国共通図書券をさしあげます。

《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

寸 感

▶いよいよ出発間近となったカンチェンジュンガ隊。すでに二隊員はネパールに渡っており、この本が出る頃にはさらに一名が出発しております。今、高田馬場のルームは、ひと頃の慌ただしさが去って、毎日静かに時を刻んでいます。嵐の前の静けさというのでしょうか。やがて隊員たちがやって来ては、このルームから遠いカンチめざして陸続と出発していくことでしょう。今、ヤルン氷河は誰を迎えることもなく冬の眠りについています。その冬の明け切らぬ3月、HAJの20余名がこの谷の奥深くへとわけ入っていきます。この一年、多くの会員の方から暖かい御援助をいただきました。誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

▶編集部では「トレッキング許可で登れる山」の原稿を募集しています。このような山は、日山協の推せん状も不要で外務省も通さないため、なかなか調査が行き届きません。実際に行かれた方、もしくは行かれた方を御存知の方、HAJ「ヒマラヤ」編集部まで御一報いただければ幸甚です。

(F)

事務局日誌 (12月)

- 1(月)小方全弘氏インタビュー(角田)
- 5(金)事務局打合せ(稲田、山森、角田)
- 6(土)~7(日)カンチェンジュンガ委員会
- 9(火)カンチェンジュンガ隊菊地隊員出発。
- 13(土)「ヒマラヤ」No.110刊。発送。
- 20(土)カンチェンジュンガ資金会議(山倉、稲田、西郡、於仙台)
- 21(日)カンチェンジュンガ隊山田隊員出発
- 29(月)事務局御用納め

ヒマラヤNo.111 (2月号)

昭和56年1月15日印刷 56年2月1日発行

発行人 柴田金之助

編集人 角田不二

発行所 日本ヒマラヤ協会

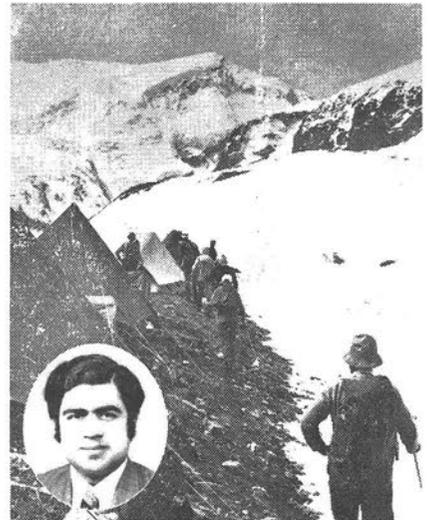
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

Shikhar Travels

シカール・トラベル

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール……
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office:Gangtok

Camp office:Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤへの装備



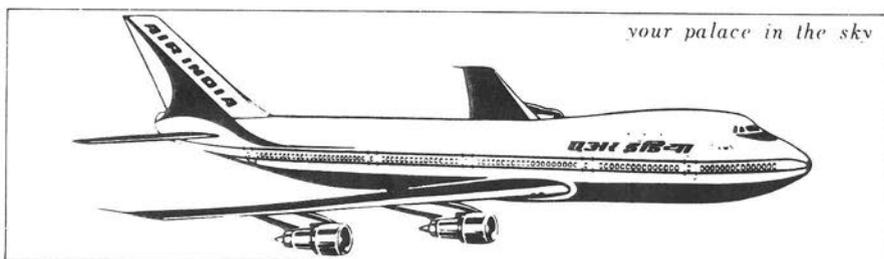
◎遠征隊の装備、相談にのります。



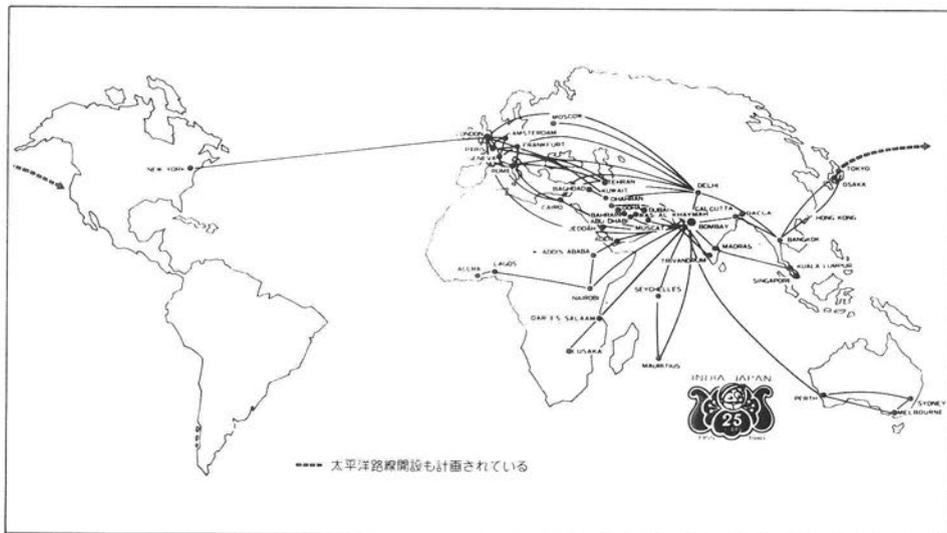
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の稱井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7-35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052)583-0747

世界の43都市をネットする
エア・インディア

- 東京●千代田区有楽町日比谷パークビル 〒100☎(03)214-7631
- 横浜●中区常盤1-2 関内日本ビル 〒231☎(045)651-2874
- 大阪●東区備後町松豊ビル 〒541☎(06)264-1781
- 神戸●葺合区布引2-1-3 新布引ビル 〒651☎(078)222-1919
- 福岡●博多区博多駅前1-3-21 八重州ビル 〒812☎(092)471-7172